

新石器化と都市化のはざま

—イラク・クルディスタン、シャフリゾール平原の先史遺跡調査(2019~20年)—

小高 敬寛 金沢大学国際文化資源学研究中心特任准教授
 前田 修 筑波大学人文社会系准教授
 下釜 和也 古代オリエント博物館研究員
 早川 裕弐 北海道大学地球環境科学研究所准教授
 西秋 良宏 東京大学総合研究博物館教授
 ナシルワン・アジズ・ムハンマド イラク・クルディスタン地域政府スレemani文化財局研究員
 カマル・ラシード イラク・クルディスタン地域政府スレemani文化財局局长

Between Neolithization and Urbanization: Prehistoric Investigations in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan (2019-20)

ODAKA, Takahiro Associate Professor, Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University
 MAEDA, Osamu Associate Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
 SHIMOGAMA, Kazuya Curator, The Ancient Orient Museum, Tokyo
 HAYAKAWA, Yuichi S. Associate Professor, Faculty of Env. Earth Science, Hokkaido University
 NISHIAKI, Yoshihiro Professor, The University Museum, the University of Tokyo
 MOHAMMED, Nawshirwan Aziz Staff, Directorate of Antiquities in Slemani, KRG
 RASHEED, Kamal Director, Directorate of Antiquities in Slemani, KRG

1. はじめに

後期新石器時代半ばの前7千年紀末、新石器化と都市化のはざまの時代にあって、これら二つの革新を橋渡しする出来事が起きた。「肥沃な三日月地帯」で新石器化を遂げていた人びとが、それまで荒野に過ぎなかったメソポタミア低地の開発に乗り出したのである。これにより、やがて文明社会が開く都市化の舞台が整えられ始めた。ところが、そのプロセスの実態はほとんど分かっておらず、とりわけ考古資料に基づく実証的な研究は滞っている。

この課題に取り組む上で、イラク・クルディスタン地域南東部のシャフリゾール平原は恰好のフィールドである。「肥沃な三日月地帯」のなかでもザグロス山麓の一角に位置するこの平原は、ティグリス河の支流ディヤラ川を介して、メソポタミア低地へと通じているからだ(図1)。

そこで、私たちは新石器化から都市化への移行プロセスをシャフリゾール平原で定点的に追跡するため、先史遺跡調査に乗り出した。

2. 背景と経緯

シャフリゾール平原ではこの十年程の間、遺跡分布

調査や発掘調査が大きく進展した。とはいえ、かつての戦禍による調査の断絶はいまだ影を落としており、考古学的な文化編年をはじめ、研究基盤は整備が行き届いていない。

事実、後期新石器時代の編年をとりあげても、「空白」の時期が残されている。平原内ではこの時代とされる遺跡が20余り確認されているものの、そのほとんどはハラフ後期の土器片の散布を根拠としている(cf. Nieuwenhuys et al. 2016a)。2013年にはこうした遺跡の一つ、テル・ベグム(Tell Begum)にて、発表者の一人(小高)がO. ニウウェンハウゼらと共に発掘調査を実施し(小高ほか2014; Nieuwenhuys et al. 2016b)、後期新石器時代末の前6千年紀後葉という放射性炭素年代を得た(Odaka et al. 2019)。しかし、それ以前にあたる前7千年紀半ばから前6千年紀前葉までの確たる考古資料はみつからない。

そこで、私たちは数年にわたる予備的な調査・研究を行ない、ダルバンディハン・ダム湖畔に立地するシャイフ・マリフ(Shaikh Marif)遺跡において、この「空白」を埋める可能性を見出した(小高ほか2018; Odaka et al. 2019)。2019年9月からは、その検証を目的とした発掘調査に臨む計画であった。

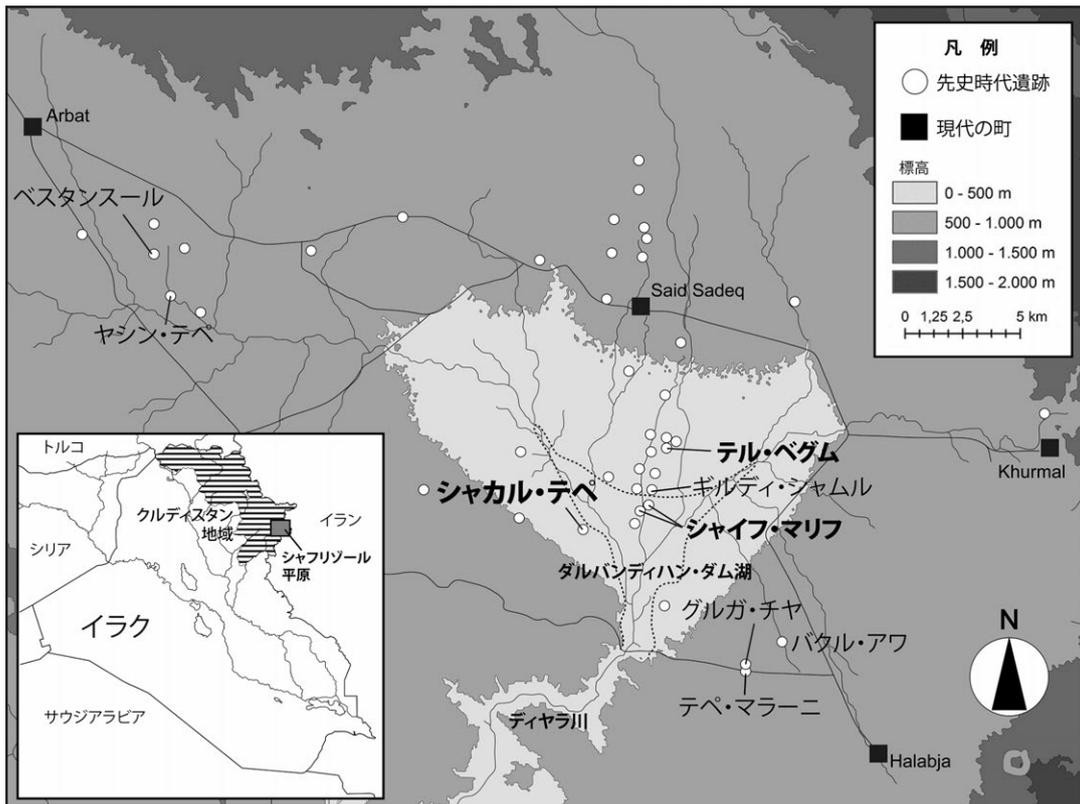


図1 シャフリゾール平原と先史遺跡の位置

3. 遺跡踏査

ところが、2019年は例年に比べてダム湖の水位が極端に高く、8月末の時点でシャイフ・マリフ遺跡はほぼ水没していた。やむなく計画の変更を迫られたが、幸いなことに現地文化財局より代替遺跡の発掘を勧められた。そこで急遽、調査対象を選定すべく遺跡踏査を実施した。

踏査した遺跡の一つが、シャカル・テペ(Shakar Tepe)である。ここでは、過去の踏査によって多数の遺物が表面採集されていた。そのほとんどは歴史時代の所産であったが、後期新石器時代とウバイド期の土器片もわずかにみつかっていた。私たちは、これら先史時代の遺物の散布を改めて確かめるとともに、遺跡の現状を把握すべく、遺跡に赴いた。

遺跡はダム湖の畔、標高およそ480mの平坦面に所在し、北東―南西方向に長い約300×150mの平面楕円形を呈すマウンドから成る(図2)。マウンド南西半が平面円形、断面台形に一際高くなっており、周囲との比高差は頂部で約20mを測る。遺跡を挟んで2条のワディが南西から北東へと流れており、遺跡のすぐ北や東でダム湖に注ぐ。また、近隣には複数の湧水が存在する。

遺跡は急斜面などを除き、耕作に利用されている。北西側には湖の侵食のためか、ほぼ標高483mの等高線に沿って崖がみられる。その崖の西寄りには、原因不明ながら、マウンドが大きく抉れている部分が3か所並んでいた。踏査時、地表面に散布していた遺物の多くは前期～中期青銅器時代の所産と思しきものであったが、この抉れた部分から崖下の緩やかな斜面を北北西に下った範囲でのみ、先史時代の土器片の散布を確認できた。これらはほぼ、型式学的に後期新石器時代のハッスーナ標準土器に類するものと、ウバイド土器として識別できるものに二分でき、それぞれ前7千年紀末と前5千年紀頃の年代が推定される。加えて、前4千年紀の粗製の鉢(いわゆる「ベベルド・リム・ボウル」)と思われる土器片もわずかながらみられた。但し、これら先史時代に集落がどの程度まで広がっていたのかは、現段階では不明である。

踏査の結果は、シャカル・テペ遺跡がシャフリゾール平原における編年上の「空白」を埋める可能性を示した。先史時代の遺物散布は希薄だが、そもそも平原内において、前7千年紀末を前後する年代と思しき遺物が相当量散布している遺跡は、シャイフ・マリフ遺跡の他にない。シャカル・テペ遺跡の場合、その散布範囲が限られているので、私たちの狙いに即した発掘

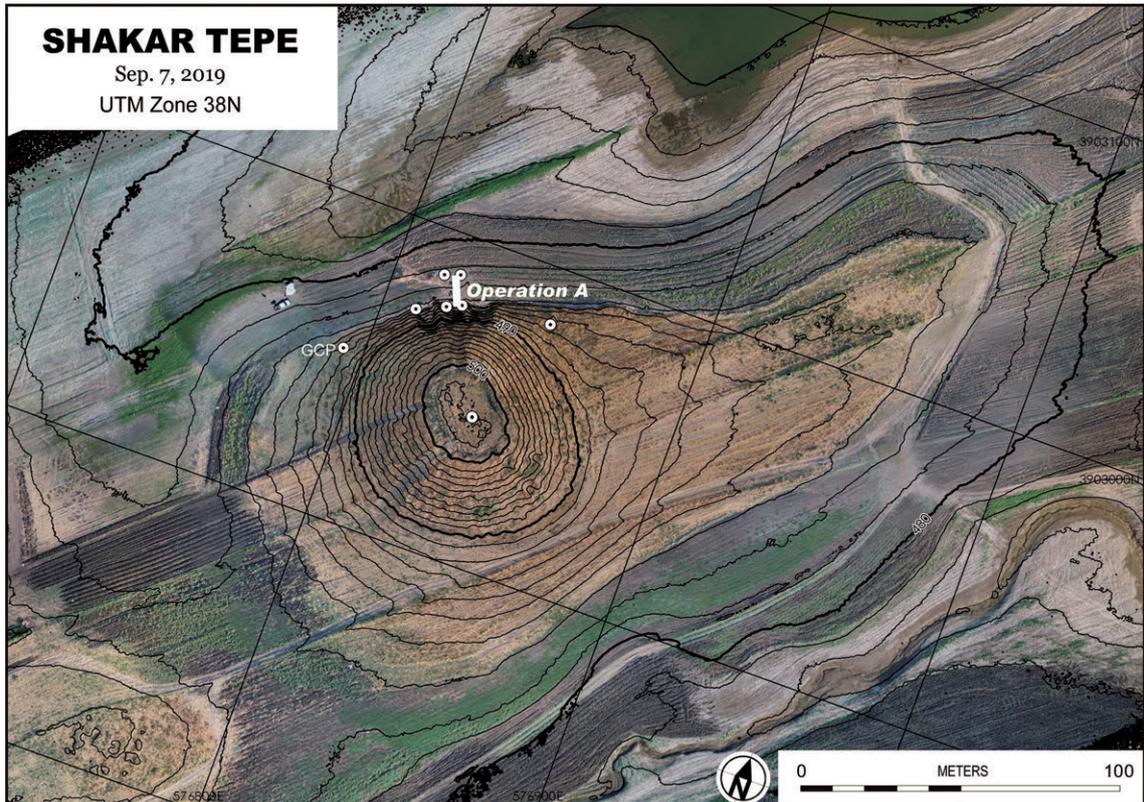


図2 シャカル・テペ遺跡のオルソ補正画像と等高線図

地点の選択はかえって容易である。しかも、遺跡は破壊が進んでおり、早急な救済措置が望まれる。よって、私たちは発掘調査の実施を決断した。

4. 発掘調査

シャカル・テペ遺跡の発掘調査は2019年9月2日から20日まで実施した(小高ほか2020; Odaka et al. 2020)。発掘区(Operation A)は、マウンド西寄りの北裾崖下から北北西方向に、長さ9.5m×幅2mの階段状トレンチとして設定した。正味17日間の発掘によって、地表面の一番高い所から5m余り掘り下げ、地山まで到達した。あくまで暫定的ではあるが、本発掘区の文化堆積は、上部から順にウバイド層、後期新石器時代上層、同下層の三時期に区分できると見込まれる(図3)。

ウバイド層は発掘区の南西側上部に堆積する。硬く締まった土層で、遺構は検出されなかった。

後期新石器時代上層は、発掘区全体で確認された分厚い土層である。検出された2基の遺構から、おそらく3つの層に細分できる。その上層では、発掘区南西隅で焼成遺構(いわゆる *tannour*)がみつき、中層は幅0.3m、残存高1mを測る練土(*tauf*)の壁を伴う(図3上)。

後期新石器時代下層は、発掘区の北端、深く掘り下げた2×2mの範囲で検出された、地山直上に堆積する黄褐色土層である。炭化物や灰混じりの土層が繰り返し挟まっている。明確な遺構はみつからないが、出土遺物、特に土器の様相が後期新石器時代上層とは異なる。

残念ながら、昨今の状況下で現地に保管している出土遺物の分析は滞っている。但し、出土遺物中、数量的に大半を占めたのは土器片である。ウバイド層からは、細かいスサや砂粒を含んだ精良な胎土をもち、淡黄色を呈する土器が多数出土した。それらの器形や、赤色や褐色、黒色で頻繁に施される彩文の文様的特徴は、これらが北方ウバイド様式に属することを物語っている(図4)。後期新石器時代上層の出土土器は多様で、いくつかのウェア・グループに分けられそうだ。例えば、砂粒を少量含む緻密な胎土で作られ、丁寧にナデ調整された淡黄色の土器は、しばしば刻文装飾が施されており、北メソポタミアで知られるハッサーナ標準土器に類似する(図5:1~9)。但し、短い斜線の列の多用といった文様構成の傾向などは、典型的なハッサーナ標準土器とは一線を画す。また、細かいスサが混和され、橙色から褐色を呈す器面が軽く磨かれた土器や(図5:10~12)、いわゆる「ハスキング・ト

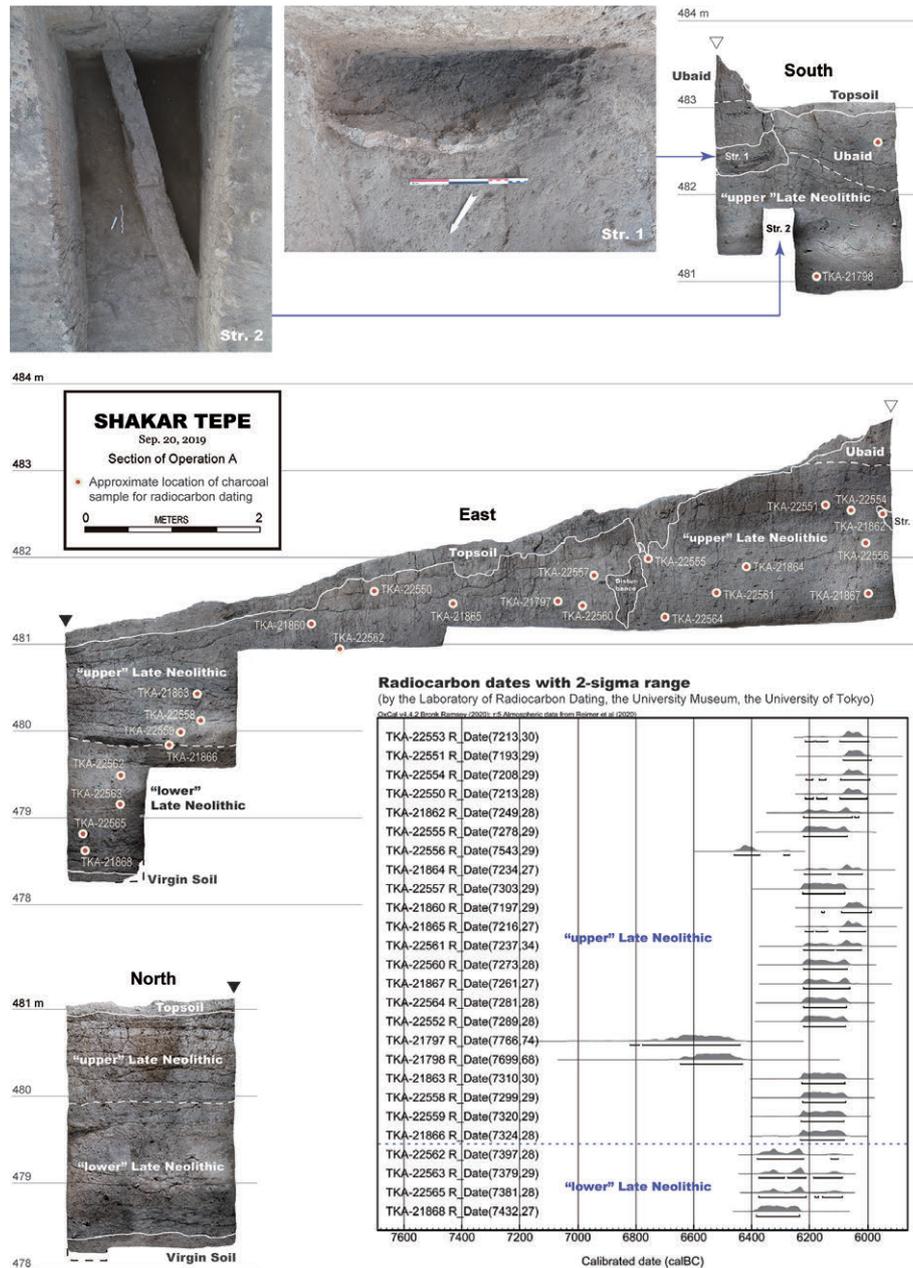


図3 発掘区の遺構・土層断面と放射性炭素年代

レイ」を含むササ混和の粗製土器も存在する(図5:13~17)。後期新石器時代下層からは、ササ混和の粗製土器だけが排他的に出土した。総じて上層の粗製土器より脆く、赤色の器面と断面にみえる黒芯が顕著である。

後期新石器時代の層から出土した石器のほとんどは、周辺のワディ河床で採取可能なチャートを用いた剥片石器であった。砲弾形の石刃石核は皆無で、ごく少数出土した押圧剥離石刃(図6:4)は搬入品と思われる。興味深いのは、長さ10~20 cmに達する大型で不定形の石刃(図6:3)と、それらが剥離された石核(図6:2)である。大型石刃は、2か所の異なる地点にお

いてそれぞれ5点が一括して出土した(図6:1)。この遺跡の石器インダストリーを特徴づける要素であり、従来知られているザグロス山麓の石器製作伝統と大きく異なる。黒曜石製石器には、16点のサイド=ブローウ・ブレイド=フレイクが含まれる(図6:5)。北メソポタミアを中心として後期新石器時代に特徴的な石器だが、本例は遺跡からの出土資料として最南端の例になる。

他には、石製のスタンプ印章や刻線装飾のある扁平ビーズ(図7:1、2)、土製紡錘車(図7:3~6)、骨製ヘラ(図7:7、8)等が目立った出土遺物としてあげられる。



図4 ウバイド土器

5. 放射性炭素年代測定

出土遺物、特に土器の型式学的特徴から、ウバイド層は前5千年紀、後期新石器時代上層は前7千年紀末、同下層は前7千年紀後葉と帰属年代を推定できる。これらを理化学的に裏付けるため、発掘区内で採取した計27点の炭化物試料について、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に年代測定を依頼した。

その結果が図3右下である。ウバイド層で唯一採取できた試料は、測定範囲外の非常に古い年代が出てしまったので除外した。遺構も検出されていないので、この層が二次堆積である可能性も考慮する必要がある。最も試料数の多い後期新石器時代上層は、ほぼ前6240~6000年の間に収まる。3点のみ、より古い年代を示しているが、これらの試料は炭素量が少ない等の問題があり、外れ値としてみなしてよいだろう。後期新石器時代下層の試料は、測定した4点全てがおおよそ前6400~6220年の間という結果であった。

6. まとめと展望

シャカル・テベ遺跡は、出土遺物の型式学的特徴だけでなく、確かな層位学的情報が付帯した試料の理化学的的年代測定によっても、編年上の「空白」の一部、前7千年紀後葉を埋めることが確認された。これはまさに、メソポタミア低地の開発が始まった時期に重なる。

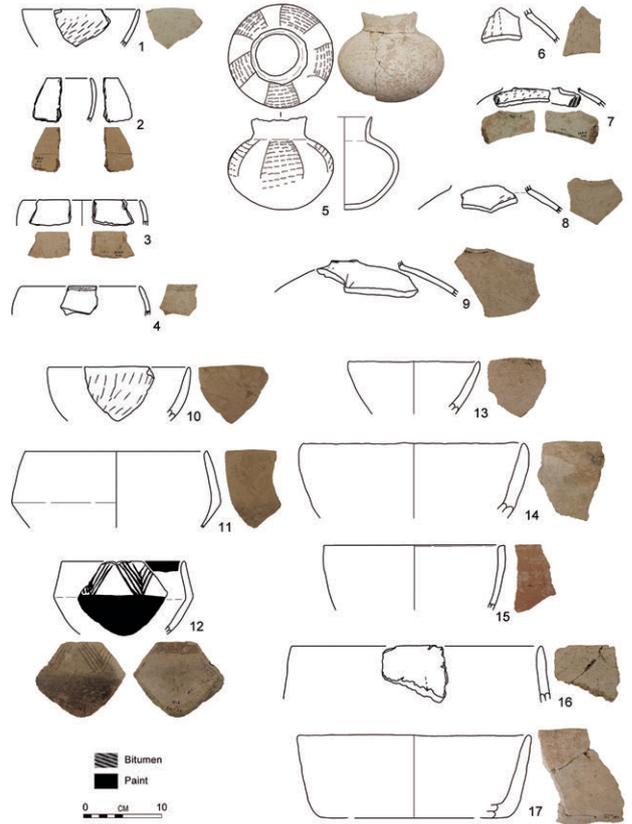


図5 後期新石器時代の土器

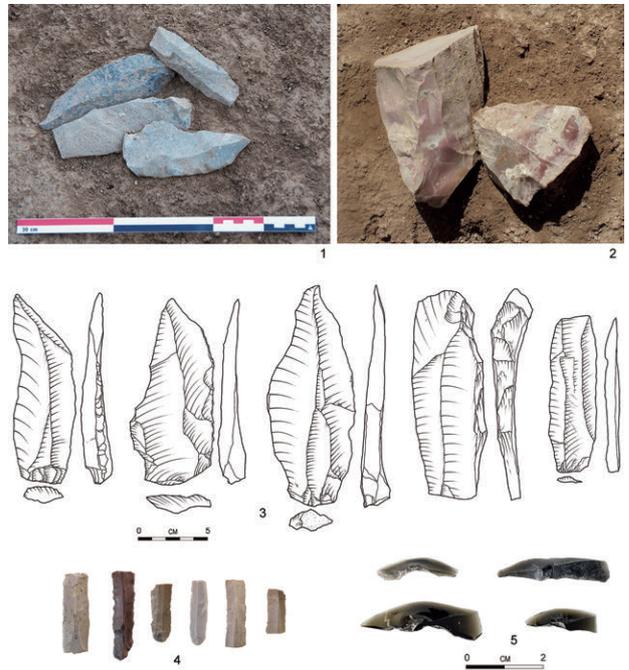


図6 後期新石器時代の石器

る。新石器化から都市化への移行プロセスの解明に向けて、貴重な研究資料を得ることができた。

出土遺物の観察からは、周辺で知られていた土器アセンブリッジや石器インダストリーに必ずしも当ては

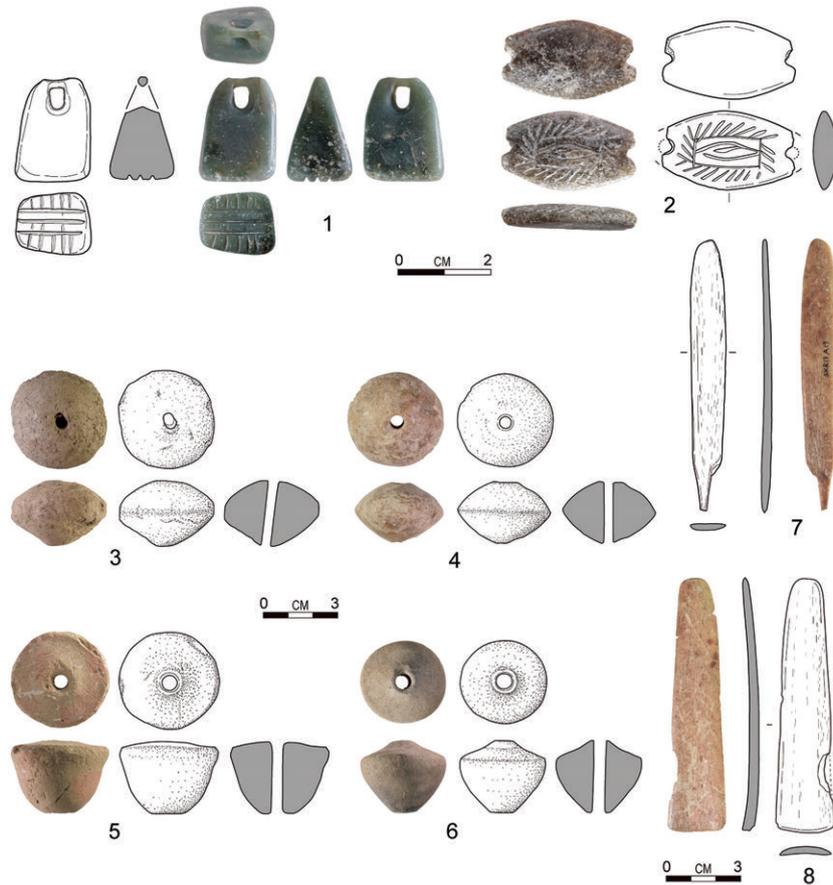


図7 石製スタンプ印章(1)、石製ビーズ(2)、土製紡錘車(3~6)、骨製ヘラ(7、8)

まらない、シャフリゾール平原に特有の地域性が浮かびつつある。次なる課題は、こうした地域的な物質文化の内容をいっそう明らかにし、広範な時空間的枠組みの中に正しく位置づけ、他地域との通時的な関係を考察していくことである。そのために、まずは現地保管されている出土遺物を詳細に研究しなければならない。そして、層位学的情報を伴う資料をより充実させるべく、シャカル・テベ遺跡の調査を継続するとともに、シャイフ・マリフ遺跡の発掘調査にも着手していきたい。

なお、本調査・研究は、日本学術振興会科学研究費・新学術領域研究および基盤研究(C)(研究代表者：小高敬寛、課題番号：19H05030、19K01111)、同・基盤研究(B)(研究代表者：沼本宏俊、課題番号：18H00743)等によって実施した。

■参考文献

- ・ Nieuwenhuysse, O., T. Odaka and S. Mühl 2016a Halaf Settlement in the Iraqi Kurdistan: The Shahrizor Survey Project. In K. Ko-
- panias and J. MacGinnis (eds.), *The Archaeology of the Kurdistan Region of Iraq and Adjacent Regions*, 257-266. Oxford, Archaeopress.
- ・ Nieuwenhuysse, O., T. Odaka, A. Kaneda, S. Mühl, K. Rasheed and M. Altaweel 2016b Revisiting Tell Begum: A Prehistoric Site in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan. *Iraq* 78: 103-135.
- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2020 Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019. *Neo-Lithics* 2020: 53-57.
- ・ Odaka, T., O. Nieuwenhuysse and S. Mühl 2019 From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain. *Paléorient* 45(2): 67-83.
- ・ 小高敬寛・早川裕弐・O. ニウウェンハウゼ・S. ミュール 2018 「新石器化と都市化のはざまーイラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の予備調査(2012~2017年)ー」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』12-16頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 小高敬寛・O. ニウウェンハウゼ・金田明美・K. ラシード 2014 「文明前夜のメソポタミア東縁部ーイラク・クルディスタン、テル・ベグム遺跡の発掘調査(2013年)ー」『第21回西アジア発掘調査報告会報告集』53-58頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 小高敬寛・前田 修・下釜和也・早川裕弐・西秋良宏・N. A. ムハンマド・K. ラシード 2020 「新石器化と都市化のはざまーイラク・クルディスタン、シャカル・テベ遺跡の第1次発掘調査(2019年)ー」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』15-20頁 日本西アジア考古学会。